研究の現場から

樹園地の除草剤研究では，樹体や周辺の環境に及ぼす影響にも気配りを

最近，樹園地用除草剤は，グリホサートを成分とした薬剤がほとんどを占めている。適用性研究が行われる剤もしかりである。販売している店舗を見ても，多数並べられているにも関わらず，その多くはグリホサートを含む薬剤である。グリホサートを含む薬剤の果樹園での使用回数の上限は，年3回以内と大きな容器では使用法の欄に記されている。しかし，小さな容器では，貼り付けられた説明書を広げてみないと分からない。商品に貼り付けられた説明書を剥がして見るわけにもいかないので，購入者は，記載された商品名と販売促進のためのキャッチフレーズを頼りに買っていく。

このような状況を許しておいて良いのだろうか。以前，グルホシネートを幹やひこばえに掛けて直接的な薬害が発生することを確認し，新たな薬剤でも発生の可能性が心配された。そのため，薬害試験の際，高薬量の樹幹への複数回の散布試験をするようにお願いした。しかし，前述のように多くの薬剤が商品名の異なるグリホサート剤になり，樹体への薬害を試験する薬剤も極端に減少している。

また，使用現場では，薬剤の使用回数の上限の問題だけでなく，「有用植物に掛かると障害が発生する。」と記載されていても，幹周辺に生える雑草を防除する上で雑草だけにかける面倒さから，幹に掛けてしまう。このような状況から，最近，一二年生作物だけでなく，永年生の果樹でも，除草剤の薬害ではないかと疑われる症状が発生していると聞く。除草剤の研究を行う分野，普及に携わる分野，販売する分野ともに，知識が十分でない利用者に対し，問題を起こさない正しい使用法について十分な教育をする必要がある。

「元来，除草剤は草を枯らす薬剤であり，草が枯れれば良い。」という認識は改める必要がある。従来，いくつかの別系統の除草剤を開発して世に送り出したのは，利用者がこれらの除草剤を体系的に最適な条件の下で使用し，樹体だけでなく，周辺の自然環境にも影響を及ぼさない使用法を実践してもらうためでもあったと認識している。現在のように，商品名が異なっても，ほとんどの除草剤がグリホサートを含む剤であり，利用者が選ぶ余地がない。土壌中で分解されて自然界に影響を与えないと言われているにもかかわらず，多年草や永年生の作物にかかり，生き残った部分から再生する際，成長点が分裂異常を起こす。このことを見ても，自然界に影響を与えないとは言えない薬剤である。

利用者は，雑草が生えてくる度に，違う商品名の薬剤であれば使用しても問題ないだろうと思いやすい。その除草剤に含まれる成分を確認し，年に何回使用して良いのか，散布の面倒さから果樹の幹にまでかけてしまうことを避けなければならないなどの教育を怠っているのが現状ではないだろうか。

今後，除草剤研究者や農業指導者，販売メーカーも含めて，早急に除草剤の正しい使い方を利用者に教育していく必要があると同時に，環境に及ぼす影響についても真摯に考える必要があるのではないだろうか。

（元農研機構 果樹試験場　鈴木邦彦）